

伊勢白子方言における「ル」待遇法について

佐藤 虎男

白子方言の中に、左のような一種の待遇法がある。

○ソコ ナオサナト オモトツタヤケド マタ デキヤン ワ。オ
マンタチガ ハヨ カエツテキルデ。

そこを修繕しなくちゃと思つてただんど、また（今度も）で
きないわ。あんたたちが早く帰つてお行きだから。（初老女↓むす
こたち）

○ドズキン ナ。ソナナ ドンドン ドンドン。

たたかないでよ。そんなにどんだんどんだんと。(初老女↓小女)

○ドコイ イキル。

どこへ行って？ (初老女↓娘)

○オマンワ ドー オモイル。

あんたはどう思ってる？ (初老女↓むすこ)

○オマンタチガ オイルサカイニ。

あんたたちが (こんなところに) おいでだからよ。(老女↓小

男女たち)

○ジテンシャガ ハーテ ドー シリル。

自転車がなくてどうするつもり？ (初老女↓青女)

これら「カエツテキル」「カエツテ イキル」「ドズキン」「ドズキル」「イキル」「オモイル」「オイル」「シリル」に見られる

「ール」は、主として中年以上の女性に行なわれ、主として自分より年下の、それも子とか孫とかいう身内の者、あるいはごく親しい近隣の年下の者に対するもの言いの中に聞かれる、親しみをあらわす一種の待遇法である。

二

当地の待遇表現諸法のうちで、「ール」待遇法の占める位置をみるために、いわゆる尊敬語法だけを列挙すれば、左記のようである。順序は、尊敬から親愛へ、敬意の高いものから低いものへの、およその序列を示す。

(1) ○ミエル (「ミエル」とも・上品)

○ナサル (上品)

○ナシて (この形のみ・上品)

○レハル (ラレル) (上品)

○ナハル (やや上品)

○オイデル (「ミエオイデル」とも・やや上品)

○ゴザル (「ミエゴザル」とも)

○ミヤ (いわゆる「ミエ」敬語法)

○ナル

(2) ○ミサル・ミヤサル

○ハル・ミヤハル

(3) ○ミル (これが今とりあげているもの)

○ミヤレ (この形のみ・下品)

右のうち、(2)は主として他称に関してあらわれ、(3)は対称(聞き手)に関してのみあらわれるということは、注目すべきことである。

三

この「ール」待遇法は、すべての動詞について実現するものかどうか。現実には、すべての動詞が自由にこれにあずかるとはいえないようである。四段動詞については相当の数の語をかぞえうるが、上一段・下一段の動詞については、前掲例のほかに「食ベリル」「受ケリル」を聞いているに過ぎない。

四

このこととも関連してとりあげられるのは、左のような命令・勸奨の表現である。

○ハヨ イキン。カ、エライデ。

早く行きな。ね、お利口だから。(初老女↓孫)

○マタ プラット オイン。

まだぶらつといらっしゃい。(青女↓同)

○ハヨ オキリン。

早く起きなさい。(青女↓妹)

○ハヨ ネリー、ハヨ。

早く寝なさいよ、早く。(青女↓父)

○アシタ シリー。アシタ。

明日しなよ。明日。(青男↓妹)

この表現の使用層は厚く、子供から老人にまで及ぶ。男女の別なく、自分より年下の者に対しても年上の者に対しても、親しい間がらならば、よくあらわれる。ただ、男どうしの間ではあらわれにくい。男ことばとしては、「行ケ」「来イ」「起キヨ」「寝ヨ」「セー」などの命令形がふさわしいとの感があるからである。その点から、これはやさしさのある女性的なもの言いとは言うことができる。

この命令勸奨の形は、すべての動詞についてみられるかどうか。

「ル」に比べると、かなり広く自由にあらわれるようであるが、上二段下一段動詞については、やはり限りがあって、無制限とは言いかねる。

こう見てくると、問題の「ル」と、「行キー」「シリー」など命令勸奨の形との間には、かなり大きな違いが認められ、終止形対命令形というごとき関係を単純に認めるのは危険なように思う。

ただ、言語形式上からは、両者の間に明らかな対応関係を見ることができるとは、これを表示すれば、

四 段 行キル ↑↑ 行キー(「行キ」とも「行キン」とも)

上 一段 オイル ↑↑ オイー(「オイン」とも)

起キリル ↑↑ 起キリー(「起キリン」とも)

下 二段 寝リル ↑↑ 寝リー(「寝リン」とも)

サ 変 シリル ↑↑ シリー(「シリン」とも)

カ変の命令の形は「コイ」のみで、「キー」や「キリー」などはない(やさしい言いかたは「オイー」「オイン」)。これに対応して、カ変の「ル」表現(「キル」あるいは「キリル」となるはず)は存しない。

この対応関係については、連用形との対応をも考えてみるのであるが、当方言では、四段動詞にこそ、その連用形、例えば「行キ」は存しても、その他の種類の動詞には、「起キリ」「寝リ」「シリ」のごとき連用形は存しないから、動詞連用形との統一な対応関係を認めることはできないのである。

なお、右に「オイル」「オイー」を上二段の項に掲げたのは、「お居ル」と解したからであるが、これにはいささか問題があるのである。まず形のうえでは、同じ上二段動詞の「起キリル」「起キリー」などから類推すれば、「お居リル」「お居リー」であるはずである。かつまた、これだけが「お」を冠しているとするのも、もうひとつ釈然としない。さらに意味のうえでも、例えば

○マタ プラット オイン。(前出)

○トットーイ。行つて取つてらっしゃい。

○アロトイカ・流ってらっしゃいな。

のようなのは、「してお居」と解するよりは、むしろ「してオイデ」式のものとして解しやすいであろう。もっとも、方言には、しばしば用法の自在な拡張・転用があるようであるから、こうと断定はしかねる。いまは決しかねるゆえ、待遇上の同似性ということで、かりに一連のものとしてここに掲げておいたのである。

五

上來述べてきたものは、当該事象と、それに関連する事象の登し

い報告である。それにしてもこの「ール」なる形は、いったい何ものである。いぜん疑問が残る。通時論的な説明が待たれる。

煤垣奥氏の「連用形から逆成された終止形、お書きる お説みる お泣きる等は、京言葉独特のものだが、「お」を冠せずには使わない特殊なものである。」（『京言葉』一七五頁・圈点筆者）とお説を拝見すると、この白子方言の「ール」生成存立の過程は、京言葉ほどに単純ではなく、そうとう複雑なもののようである。

（一九六二、一一、一九）

（広島・国泰寺高校教諭）